

佐藤 長著

『チベット歴史地理研究』

若 松 寛

本書は、名著『古代チベット史研究』の著者佐藤長氏が近年もつとも精力を注いでおられるチベットの歴史地理研究に關して放つた第一弾である。著者は、今を去る約二十年前、『古代チベット史研究』を上梓されてからは、その研究対象を古代王国崩壊以後、近世ダライラマ政權成立前後に至る、主としてチベット中世史に求められ、幾多の名篇力作を世に問われた。次いで著者は、今回見事に結実したチベットの歴史地理研究に眼を転ぜられたが、これに關する最初の成果は、昭和五十年發表の「唐代青海東辺の諸城塞について―『玉樹県志稿』の紹介を兼ねて―」（『史林』第五八巻五号）（本書、第二章第一節所収）であろう。爾来今日に至るかくも短日月の内にこのような巨冊を世に問われたことは、まことに驚嘆の他はない。本書には、この間に發表された既往の諸論考については、補訂を加えて収録するとともに、分量的にはこれをはるかに上廻る、新に書き下した論考をも加えて、全体に体系化がなされている。本書の構成は次の如くである。

序

凡例

略語表

前言

第一章 清代における青海・ラサ間の道程

第一節 清代の官道（一）―ラサ・ドロンバートル間―

第二節 清代の官道（二）―ドロンバートル・西寧間―

第三節 第三代バンチェンラマの往路

第四節 第五代・第七代兩ダライラマの往路

第五節 第三代バンチェン・第五代ダライ兩ラマの帰路

第二章 唐代における青海・ラサ間の道程

第一節 青海東辺の諸城塞の位置―玉樹県志稿の紹介を兼ねて―

第二節 黄河上流の諸城塞の位置―「河西九曲の地」問題を

中心として―

第三節 青海・ラサ間の道程

第四節 ラサ・インド間の道程―「吐蕃」「羊同」などの名称を中心として―

第三章 吐谷渾における諸根拠地

第一節 大夏河流域の歴史地理的考察―水経注の記述を中心として―

第二節 吐谷渾の根拠地

第三節 唐の李靖の対吐谷渾作戦路

第四節 隋の煬帝の吐谷渾征討路

第四章 漢代における羌族の活動

第一節	後漢代における羌族の活動(一)——焼当羌の反乱を中心として——
第二節	後漢代における羌族の活動(二)——先零羌・東西羌の反乱を中心として——
第三節	羌族の来源と前漢代におけるその活動
第四節	趙充国及び馮奉世の対羌作戰
第五章	古代王国成立前後のチベット情勢
第一節	入吐蕃道に沿う諸族と中央チベットの五翼
第二節	主として中央チベットにおける地方支配者区域と千人隊
第三節	古代統一王国以前の諸種族・小王国
第四節	ツァンとボエの地理的範圍
結言	
索引	
英文概要・目次	

付図

第一図	清代西寧・ラサ間道程
第二図	青海東辺地区略図
第三図	唐代西寧・ラサ・インド間の道程
第四図	大夏河流域略図
第五図	吐谷渾関係略図
第六図	漢代諸羌族略図
第七図	古代チベット王国千人隊所在図

本書の内容と著者の既発表の論考との関係は次の如くである。

第二章第一節は、前述の通り。同じく第二節は、「河西九曲の地について」(『東洋学報』第五七卷一・二号、昭和五十一年)、同じく第三節は、「唐代における青海・ラサ間の道程」(『東洋史研究』第三四卷一号、昭和五十年)、及びその英訳「The Route from Kokonor to Lhasa during the Tang Period」(*Acta Asiatica*, vol. 29, Tokyo, 1975. 同じく第四節は、「吐蕃・羊同」などの名称について」(『東洋史研究』第三五卷一号、昭和五十一年)、第三章第一節は、「水経注」にあらわれた大夏河について」(『鷹陵史学』第三・四合併号、森鹿三博士頌寿記念特集号、一九七七年、同単行本、同朋舎、一九七七年)、同じく第四節は、「隋の煬帝の吐谷渾征討路について」(『江上波夫教授古稀記念論集、歴史篇』山川出版社、昭和五十二年)。このように、既往の諸論考を骨子として若干の補訂を加えて成った章節を除いて、他の章節はすべて新しく書き下されたものである。

次に、本書の内容の概略を順を追って紹介する。

第一章では、清代における青海・ラサ間の道程を説明するために、まず清代の中国文献『衛蔵図識』・『西蔵誌』・『西寧府新志』に記載せられた官道を克明に地図上に再現し、それを下図として、側道、即ち一七七九(乾隆四十四)年の第三代バンチェンラマの北京訪問旅行時の道程を決定し、次いで、それらの道程を基礎として、第五代ダライラマ(一六五二年北京訪問)及び第七代ダライラマ(一七二〇年クンブムからラサへ旅行)のルートが決定されている。こうした研究は、もとはと言えば、本書の目的が、「古代王国と中国との交通路を明かにし、古代王国成立前後の諸

族の位置を確定し、王国内部における各部族の位置をも明確化することである。」(二頁)ためであり、この目的を達成するために、第一段階として、現代に近い清代の青海・ラサ間の道程が選ばれているのである。著者は、この道程に沿う百余の地名を逐一綿密に考証して決定し、詳細な地図を作成された上、各ルートの帯びる性格・意義をも明かにされた。この場合特に印象的であることは、チベット語については今更言うまでもないが、著者のモンゴル語への深い造詣である。ルートに沿う地方はモンゴル族と古来深い関係にあり、特に明代以後の場合については改めてここにのべるまでもない。従ってモンゴル語の地名も多数ここには入っており、それらは一見チベット語風の装いをすら帯びていることがある。著者はそうした地名に対して、これをモンゴル語に還元して、合理的な解釈を以て位置決定の有力な手がかりとなしているのである。日頃著者はこの地方の史的研究に対して蒙蔵語兼備の重要性を示唆されて来たが、こうしてお手本に接してみると、改めて身のひきしまるおもしろいがある。

第二章は、前章で明かになった清代の西寧・ラサ間の道程を下図にして、唐代の両地間のルートを考究したものであるが、その確定化に伴って、青海地方の唐朝によって設置された諸城塞の位置も同時に決定された。まず入吐蕃道の起点をなす鄯州について、これを碣伯県と見る民国初期の周希武の説(『玉樹土司調査記』)に左祖し、これを詳しく紹介し、その調査記に逐一検討を加えて、入吐蕃道の発端に存在する湟水上流及び葑水沿いの諸城塞を定置することに成功した。この際特に興味を呼ぶのは、明末清初に異民族の貿易地として殷盛を極め、その後、湟源・西寧に繁栄を奪

われたドバ(多巴)の位置の確定である。その原名も *Mto Pa* と決定された。次に、唐代の開元より天宝にかけて吐蕃の青海地方経略の根拠地であった河西九曲の地について、これが従来必ずしも明確に決定されていなかったのであるが、著者によってマンラ *Ma-la* 川流域に比定された他、その原名も、突厥碑文の *Togus kisa* との対比の上で、モンゴル語族吐谷渾による呼称 *Kisun ekin* と想定された。このように九曲即ちマンラ川流域と比定されたその結果として、従来難解とされて来た明末オルドス系モンゴルのチンサン・ホロチが拠った莽刺川・捏工川の位置も解決を見ることになったのである。即ち莽刺川は右のマンラ川(九曲)に、捏工川はその近傍のレブコン *Reb-shon* 地帯と決定された。さらに著者は周到にもこのマンラ川流域に、清代青海の大ラマ、チャガンノムンハンの牧地が置かれていたことを指摘するのを忘れていない。以上の例からも分っていただけとおもうが、一つの地名の比定に当たっても、著者の視野が常に全時代的に及んでいることである。これは本書の特色でもある。九曲の位置と併せて、黄河上流の諸城塞をことごとく定置したのち、著者は、新唐書地理志に従って入吐蕃道そのものの道程を追跡、調査して、ラサに到達し、そこから更にインドへの通路の検討へと移っている。ここでは、吐蕃・羊同等の名称・地域の確定から開始しているが、吐蕃については、ローバー *Lho phywa* の対音と見る山口瑞鳳氏の新説を却け、ラサを中心とするウイ *Dun* の同義語として *Dun*・*Dbud* を仮定された。而してこの *Dun* が吐谷渾において **Tubun* なる形で受容され、さらにそれが吐蕃 **u b'i-wun* で転写されたとなし、また *Dbud* の方の系統を引くものとして、突

厥碑文の *Tuput* を仮定しておられる。さらに、羊同についても、これをヤト *Yastod* の対音とみる山口説を批判して、ニャンロ *Yanro* を提唱し、ニャン河流域のギャンツェを中心とするツァン地方をその区域とするとされた。以上の吐蕃・羊同の問題については、批判的見解も既に出されており（一九七六年の歴史学界「回顧と展望」）チベットの項、執筆者長野泰彦、『史学雑誌』第八六編五号）、特に、そこに言う、当時のチベット文献類には、「中央チベットを示す *Dbus*・*Dbus pa* は存在しない」という批判は重大であるが、著者佐藤氏は改めてそれらの呼称の存在を認め、事例を挙げて自説の補強に努めている。なお、筆者の感想として、*Dbuñ*・*Dbud* が古語として何時まで通れるのか示していただけばと思う。この他、本章では、薄縁をブータンのパロ、悉立をチュンビ溪谷、章求拔を最初チュンビの南西山中、移動しシッキムとするなどの新説が示されている。

第三章は、前章で明かになった唐代における青海湖東辺・南辺の地勢並にそこに置かれた唐側の諸城塞の位置に基き、それを下図にして、さらに時代を南北朝に遡らせ、当時この地方に目覚ましい活躍を見せた吐谷渾の諸根拠地及び吐谷渾に対する隋・唐の作戦路を採ったものである。まず、黄河の支流の大夏河即ち灘水に関する水経注の文を詳細に検討して、その水系を決定し、次いで、吐谷渾について、その王庭が少くとも三度移動しているとして、その赤水・莫何川・伏俟城の位置を決定し、併せて、吐谷渾の四つの重要な根拠地、いわゆる四大戌の位置も明確に比定されている。かくして確実になった吐谷渾の主要な城塞の位置を手がかりとして、従来不明であった唐の李靖、隋の煬帝の吐谷渾征討

路を解決に導いたのである。なお、ここに見える往古の地名が、尤も本章ばかりでなく、本書全体について言えることであるが、清代のチベット文献『テプテルギヤムツォ』の記載と丹念に対照されていて、そのことが本書を明清代青海史研究の上でも不可欠の文献たらしめることは疑いない。換言すれば、明清代史に現れるこの地方の重要な地名について、読者は本書を繙けば、往古に通る歴史的沿革に理解を及ぼすことができるであろう。

第四章は、漢代青海の主人公であった羌族の活動を解明したものであるが、この場合も、地名・族名を確定することが主眼とされている。まず、後漢代の姚当羌の反乱、次いで先零羌・東西羌の反乱が考察され、それによって後漢代の諸羌族が何処に根拠地を持ち、如何ように移動したかが逐一確定された。こうした研究も、第二章及び第三章によって青海の歴史地理的状況が明かになったが故に可能となったのである。ここで特に興味あるのは、発羌の対音の問題である。著者はこれについて、東部チベットにいたチベット人の称呼とされている *Bod* を想定し、発 *piant* は *Bod* に音の上でも完全に一致するとして、発羌をチャー *Phywa* (古音ビャー) という支配者の族名を写したものとする山口瑞鳳氏の説を却けている。而してその *Bod* の意味については、*phod* は「勇敢な(人々)」を仮定して、そのような人々の集団として *Bod* が用いられるようになったであろうとしておられる。次に、羌族について、遡ってその来源と前漢代における活動が克明に考察されている。ここでも、羌の対音がやはり興味を呼ぶ。著者はこれをチベット語の *kyuñ* 又は *kyu* と考え、それは人間の集団の意味とされる。最後に、本章では、趙充国及び馮奉世の対羌

作戦を取り上げ、それぞれの進軍路と作戦が考究されている。

第五章は、如上の考察を基にして、一転して隋唐代に下り、古代王国成立後のチベット高原の地名・族名を定置しようとしたものである。本章は九十頁を越す大論文で、しかも新に書き下されたものであるが、考察の順序としては、(一)先ず入吐蕃道に沿って諸族の位置を定め、(二)次いでチベット王国の軍制・行政区を考え、(三)さらに東方地域の諸族の位置を決定するものである。

(一)ではまず、白蘭・多弥・蘇毗などの諸族の地理的位置について再検討するが、多弥に対しては、その居住区をダン・Idan地域に比定し、ダン・Idan myi の対音とした。蘇毗 Sum pa に対しても、『ケーペーガトン』の古代王国の組織に関する記事、特に五翼のそれを精密に分析して、居住区の四境が決定された。

(二)では、同じく『ケーペーガトン』のチベットにおける地方支配者区域十八区及び千人隊の記事について、それらの所在地を逐一比定している。以上の(一)、(二)においては、トゥッチ・山口瑞鳳兩氏に数多の批判を加え、新説が対置せられている。(三)では、隋書附国伝及び敦煌文書十二小王国表によって、統一直前のチベットにおける少数諸族の存在と位置を追求する。隋書附国伝には、女国をはじめ二十一の諸族の名が挙げられているが、これらについて位置と族名を考え、附国自体には、吐蕃の前身を比定し、附国は、吐蕃のツェンボの姓プツギェル Spu Tsyal の Spu の対音とした。次いで、同時期の中央チベット内部の諸部族の配置を十二小王国表に基いて検討し、すこぶる合理的な解釈を導き出している。最後に、当時チベットの総称として用いられていたツァン Gzan、ツァン Bod とについて、それらの地理的範囲に検

討を加え、統一王国出現前後までには、ニャンロのツァンを中心にチベット全体はツァンと呼ばれていたが、ボエ族がヤルルン王朝を中心にチベット全域を支配するとともに、ツァンの総称はボエに変わり、ツァンは現在のツァンの西半の地域にまで限定されてしまったと結論される。

以上、本書の内容の概略を順を追って紹介して来たが、地名・族名の緻密な考証に基いた重厚な諸論考の集積であるだけに、どの程度紹介し得たか至って心もとない。そもそも「地名の確定なくしては歴史の研究は進展しない」(三頁)とする著者の信念から、この面におびただしい精力を傾注され、その結果として、古代王国とそれにいたるチベット族の歴史像を見事に浮び上らせることに成功されているのである。考証の成果の一つ一つは附図七葉となつて具現しているが、これらはその詳密さにおいて前人未到であり、しかも漢から清まで及ぶとあっては感嘆の他ない。著者がその研究の対象を全時代的に選んでおられることはいかにも効果的である。例えば、清初のシルゴル Ghol 河を解明されることによって、漢代の賜支(析支)水を決定に導き、ひいては唐代の樹郭城も定置せられているのである。こうした広い研究視野が本書を成さしめた一つの鍵であろう。次には、繰返しになるが、著者の諸言語に対する造詣の深さであろう。特にモンゴル語に対しては讀嘆の念を禁じ得ない。唐代の大非川を検討して、『大清一統志』の塩河を想起し、両者を同定することによって逆に大非川の対音を Dabusu youl と仮定することすらなされているのである。この対音の方法は、唐代の中国語に現代モンゴル語をあて

はめるという意味では言語学的にはアナクロニズムかもしれないが、唐代のモンゴル語音の復元が全くなされていない現状では許容さるべき方法といわなければなるまい。逆に著者の方法によって、モンゴル語音復元のための資料が提供されることになるであろう。

本書はこれほどの巨冊であるにかかわらず、実によく校正が行き届いていて、謹厳な著者の性格を髣髴させるものがある。気がついた誤植らしきものはわずかに二、三にすぎない。敢て指摘すれば、*Temegen kujuguu* (二六・三六・五二頁) は *Temegen kujugū* に、*Yunsyebu* (三二頁) は *Yungsyebu* に、*Ston bikhur dgon pa* (第一図) は *Ston bikhur dgon pa* であろう。また第七代ダライラの道程の内 (七四頁)、ナクチュとバンロン間に *Bo ha man nas* (モンゴル訳「乾隆三十二—一七六七年完成」) *Buq-a mangnai* (Part I, 75b) が入るべきであろう。この地に到着した日、ナクチュの部族民約二千人がダライに表敬のため莫大な供物を捧げたとの記事がある。なお序でながら、バンロンの次のヤンラ *G-yai ra* (七四頁) についで、著者はこれを *G-yai sgo la* と同一視し、而して *G-yai sgo la* に「細羊の頭の(形をした)山」(*sgo* を *mgo* の誤りと見る)との釈義を加えているが (一九頁)、『モンゴル訳』は *G-yai ra* を *Kesig-un kutiy-e* 「恩賜の館」(Part I, 75b) と写しつゝ *kesig = g-yai ba, kutiy-e = ra ba*。もしこのモンゴル訳に従えば、*sgo* を *mgo* の誤りと見る必然性はなくなるのではないか。いずれにせよ、モンゴル訳の是非について一度御検討願いたい。

以上、至って拙い紹介に終始したが、本書が『古代チベット史

研究』と並んで、すべてのチベット史研究者の座右の書となることは疑いない。それと同時に中国史・内陸アジア史の研究者にとっても必ず繙かれるべき文献であると信ずる。幸い優に七十頁を越える非常に懇切な索引も附されているので、本書の価値はそれによって一段と高められるであろう。終りに、著者の健康と研究の一層の進展を祈り上げるものである。

(A5判 四三四頁 索引七六頁 付図七葉 一九七八年五月
東京 岩波書店 七五〇〇円)

(京都府立大学助教授